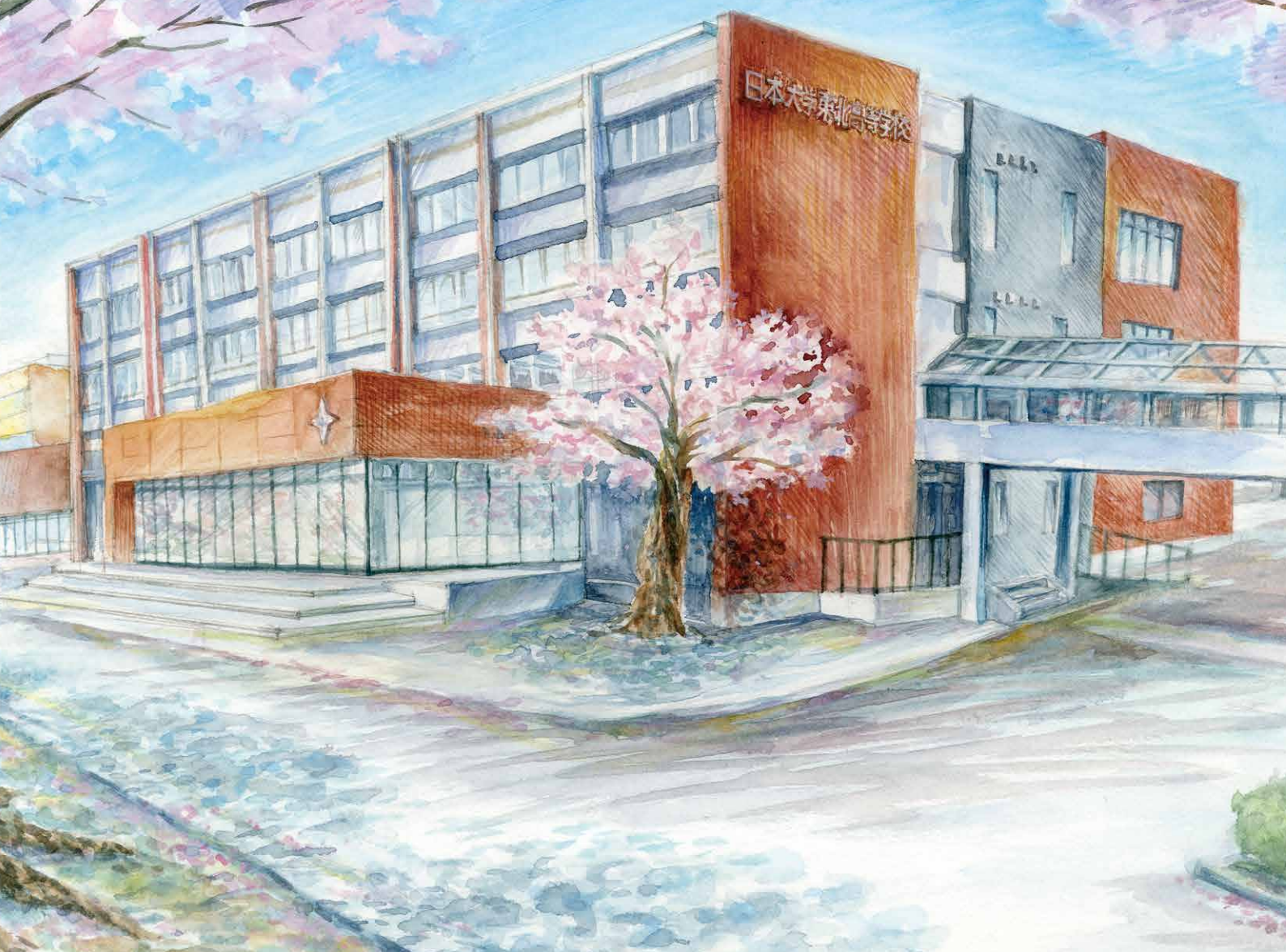


日本大学東北高等学校
同窓会会報誌

桜 OUDA 采

第23号



会長就任のご挨拶

日本大学東北高等学校
同窓会会長
大場 俊之 28期生



同窓会の皆様におかれましては益々のご健勝、ご活躍のこととお慶び申し上げます。また日頃より同窓会活動の運営におきまして、多くのご指導とご協力を賜りまして、心より厚く感謝申し上げます。

この度、令和7年・8年度日本大学東北高等学校同窓会(アカシヤ会)の定例総会において、会長の重責に任じられました28期卒業の大場俊之でございます。

村山廣嗣前会長が同窓会の創設70周年記念式典を機にご勇退されるとのことで、会長職を引き継いでほしい旨のお言葉がございましたが、4万人に迫る卒業生を数える母校同窓会会長に果たして私などが務まるのかと、正直相当悩みました。熟慮の末、少しでも母校のお役に立てるのであればとお引き受けすることといたしました。

会長職の任務は、学校長をはじめ同窓会事務局、同

窓会役員、そして卒業生である同窓会の会員の皆様方のお力添え無しには成し得ないことであります。何とぞご協力の程よろしくお願い申し上げます。

さて、私は令和5年7月の同窓会総会にて副会長に任じられ、今日に至る訳であります。その折、数十年ぶりに母校を訪れた時の衝撃は忘れられません。当時の面影を残すのは記念体育館や弓道場くらいであり、他の建築物や施設は、ほとんど現代的に立て替え整備されており、その変わりように大変驚きました。時代が違うとは言え、当時の校舎を知る者としては、今の生徒さん達がそれらの素晴らしい環境で勉学や部活動等に打ち込めることが、うらやましい限りです。そう思うのは決して私だけではないはずです。

母校のこれらの環境は、社会で活躍する人材育成に大きな力になるのは間違いないことであると私は確信しております。そして、今後も将来に向かって、一步一步前進していく若者達の学び舎として発展していくことでしょう。

結びに、日本大学東北高等学校同窓会がこれまでも増して絆を深めていくためには、会員皆様方のご協力が不可欠です。重ねてお願い申し上げ、私の同窓会会長就任のご挨拶と致します。

CONTENTS

会長あいさつ	2	令和6年度 母校のトピックス	22
日本大学東北高等学校同窓会 創設70周年記念式典	3	支部だより	23
母校見守るイチョウ植樹・記念碑お披露目	5	クラス会だより	23
〔祝詩〕日本大学東北高等学校同窓会70周年を祝して 桜朶の下に 阿部正栄	6	退職教職員の会 令和7年度	24
本校同窓会創設70周年記念号 巻頭企画	8	受章おめでとうございます	24
桜朶の下に 楽譜	17	お悔やみ	24
音・美・書 芸術系3教科が解説する「青春セレブ」	18	桜朶編集部よりお知らせ	26
		編集後記	26



日本大学東北高等学校同窓会 創設70周年記念式典開催

去る10月3日(金)、郡山ビューホテルアネックス3階花かつみの間で、本会の設立70周年の節目をお祝いする記念式典および祝賀会が開催された。来賓・退職教職員・現役教職員および同窓生会員、総勢220名が出席し、母校のさらなる発展を祈念した。

司会進行は本校OGの高橋夏美氏(第47期生)と吉田絵里奈氏(第51期生)の2人。息の合った絶妙なマイクパフォーマンスで式典の最初から最後まで担当し、会を盛り上げた。

諸橋近代美術館館長の諸橋英二氏(第35期生)の「美術館の舞台裏」と題した企画展の運営についての記念講演に続き、本会の発展に尽力した方々への功労賞授与と母校への記念品目録授与が行なわれ、本会村山会長より佐々木校長に手渡された。



同窓会の発展に尽力された方々



記念講演「美術館の舞台裏」
諸橋近代美術館館長 諸橋英二氏



母校への記念品目録授与

70周年記念式典実行委員長の村山廣嗣会長のあいさつに続き、佐々木稔学校長、工学部根本修克学部長、椎根健雄郡山市長から祝辞をいただいた。



実行委員長あいさつ 村山廣嗣前会長



佐々木稔学校長



工学部 根本修克学部長



椎根健雄郡山市長



オリジナル曲「桜の下に」を弾き語りで披露した
高橋敏行氏



祝詩「桜の下に」をよせた阿部正栄氏

その後、スクリーンの映像とともにこの日のために創られたオリジナル曲「桜の下(もと)に」が高橋敏行氏(国語科第26期生)による弾き語りで披露された。この曲は、すでに退職されている阿部正栄氏(元国語科教員 第14期生)の祝詩「桜の下(もと)に」に、高橋氏が作曲したもので、会場は感動に包まれた。



前会長へ記念品と花束が贈られました



新会長の乾杯の発声で祝賀会が開かれました

会に先立って開催された定例総会で新任された大場俊之会長(第28期生)は「同窓生皆様のご指導の下、精一杯母校のために尽力して参ります。」と力強く決意を述べ、高らかな乾杯の発声によって和やかに祝賀会が幕を開けた。

創設70周年記念式典

長谷川賢児(旧健吾)氏(第33期生)の極真空手の演武パフォーマンスに続き、空くじなしの「お楽しみ大抽選会」では、温泉ペア宿泊券や東京ディズニーランド宿泊券などの豪華景品を引き当てる会員もいて、会場は歓声に包まれる中、大いに盛り上がった。参加された会員の皆様、1年前より準備・運営に携わった実行委員会役員の皆様、そして陰で支えていただいた関係各位の皆様に心より感謝申し上げます。

(以上、本会HPより抜粋再構成)



極真空手の演武パフォーマンス



合唱部の動画に合わせて
学生歌を合唱



広報誌『桜朶』の出版にご尽力いただいた高橋敏行先生へ
同窓会から記念品を贈りました



本校教員の宗像忠典先生の万歳三唱で閉会



母校同窓会創設70周年記念式典に 参加して

平成12年度普通科卒 47期生 高橋 夏美氏

秋の風が心地よく感じられた10月3日、日本大学東北高等学校同窓会70周年記念式典が盛大に執り行われましたこと、改めて心よりお祝い申し上げます。私もアカシヤ会郡山支部事務局として当日の司会進行を務めさせていただき、先生方の丁寧なサポートのおかげで無事に大役を果たす事ができました。改めて感謝申し上げます。その節目の日を皆さまと共に迎えられたことに深い感慨を覚えています。

式典当日には懐かしい先生方にお会いでき、言葉を交わすことができました。来場された同窓生のみなさんの久しぶりの再会を喜ぶ嬉しそうな表情にも、心温まる感慨深い気持ちになりました。お互いの元気な姿を確認し合えた、そんな良い機会を得られた式典だったと思います。どんなに時代が進んでも、目の前でその元気な姿を確認し合える、その価値を、歳を重ねるにつれてより強く感じます。私にとっては、対面でお話しができることの幸せをより一層深く感じられた式典となりました。また、式典の際には在学中の思い出が次々と蘇って参りました。野球部が甲子園出場を果たし、寝台列車で応援に行った思い出や、それから、担任だった早田先生が当時、クラスの日直に一言日記を書くようにノートを用意してくれていた事、その何

冊もある日記ノートを3年前に早田先生から見せていただく機会があった事、懐かしさやら恥ずかしさやら、当時の気持ちが鮮やかに蘇る気持ちを味わいました。

現在、息子が母校に在学していることもあり、早田先生とは今でも学校でお会いすることができ、そのご縁が続いていることをとても嬉しく感じています。私はNPO法人レディマララに所属しており、ボランティア活動で毎月母校へ生理用品をお届けしております。生徒の皆さんが安心して学校生活を送ることができるようこれからもサポートして参ります。今回の記念式典に合わせて、同窓会アカシヤ会からは生徒たちへ屋外活動に必要な TENT を寄付いたしました。先日行われた秋の運動会の際に、お役に立てたのではないかと思います。

これからも、母校の後輩である生徒のみなさんや先生方、そして私たち同窓会が“お互いの声が届く距離感”を大切にしながら、心通う支援と繋がりを育んでいきたいと思ひます。

創設70周年という節目を励みに、今後も母校の発展に寄り添い続けて参ります。



母校見守るイチヨウ 植樹・記念碑お披露目

12月6日(土)創設70周年記念事業の一環で、アカシヤ館多目的ホールと第二体育館前の広場にイチヨウの木を植樹し、記念碑とともにお披露目した。このイチヨウの木は、新校舎建て替え前の旧校舎2号館南側に並んでいた大木の種から約5年かけて育てたもの。母校の約70年の歴史を見つめてきたイチヨウの木を次の世代にも新たに残そうと移植した。



大場俊之会長は「この苗木はまだ小さいけれども、学校の歴史とともに大きく成長し生徒たちを見守っていつ

ほしい。私たちも今後学校に足を運ぶたびに成長を楽しみにしたい。」とあいさつした。村山廣嗣前同窓会会長(兼70周年記念実行委員長)、佐々木稔学校長も「2代目のイチヨウの木を大切に育てていきたい」などと述べ、記念碑の除幕を行った。

記念碑には前副会長(現顧問)の宗像幸雄氏がデザインした長寿の象徴「亀の甲羅」をあしらった台座が据えられてあり、イチヨウの木とともに末永く学校と生徒の発展を見守ってほしいという願いが込められている。



〔祝詩〕

日本大学東北高等学校同窓会70周年を祝して

桜朶の下に^{もと}

阿部 正栄



みちのく

ふるさと

うかぶ母校は

花がすみ

……通学路のがんたら橋で

川面に飛び上がる

魚に自分を見つけ

アカシヤ林で

さぐる志向

はじまりの風……

脈打つ学びの

鼓動

桜花の^{おうか}

心音の調べ

導く

桜朶の広場

今朝^{けさ}

瑞雲^{すいうん}が湧く

生命が微笑み

絆が息吹く

大らかな誇り

揺るぎない伝統に

充実のまなざしが

まっすぐに

前へ

未来へ



風とゆききすると

聞こえてくる

諭す声

叱咤激励の情熱

情熱は大空に広がり

校舎にそそぐ

清和^{せいわ}を願うごとく

校庭に立つ

先達の木に

刻まれた

七十路^{ななそじ}の年輪

地を鋤^すき

根を下ろす

古稀の力

※がんたら橋

安積永盛駅からの通学路、

阿武隈川に架かる初代の板

張りの橋名「珍鳥橋」を通

称「がんたら橋」と呼んだ。

詩・あべ まさえい

○日本現代詩人会員

○第39回(昭和61年)福島県文学賞受賞

○日本大学付属高校文芸コンクール詩の選者

○中山義秀顕彰会理事

○矢吹町文化振興審議会会長 他

○元国語教諭

○第14期卒

○矢吹町在住

本校同窓会創設70周年記念号 巻頭企画

卒業生と母校を繋ぐ絆 ❀桜朶❀を復刊させた立役者

～ 高橋敏行先生(第26期卒)インタビュー ～

同窓会事務局役員を歴任され桜朶復刊にご尽力された高橋敏行先生に、桜朶編集委員 大山友希奈先生がインタビューを行いました。



とは？

本校第一期生*故廣長威彦(ひろなが たけひこ)氏により昭和32年7月10日創刊され、7号まで発刊された。



昭和26年[1951]日本大学東北工業高校開校
昭和30年[1955]日本大学東北工業高校同窓会発足

昭和32年[1957]7月10日桜朶創刊号発刊
昭和33年[1958]12月13日桜朶第2号発行
昭和34年[1959]12月24日桜朶第3号発行
昭和35年[1960]12月20日桜朶第4号発行
昭和36年[1961]12月20日桜朶第5号発行
昭和37年[1962]12月20日桜朶第6号発行
昭和41年[1966]3月3日桜朶第7号発行

創刊号から第6号まではタブロイド判の両面2ページであった。第6号から第7号発行までは3年のブランクがあるが、一気に12ページとなった。

同窓会長は、創刊から第2号までが長谷川武氏、第3号から半沢忠氏、第7号は寺田宏氏であった。廣長氏は創刊から4号までと7号で編集人を務められた。

第7号で止まってしまった裏話

当時の編集者が12ページというボリュームを続けることが難しくなった。なんとか続けようと、各支部に落書き帳と称したものを回し、記事集めを募ったが、回収も難しく、各々仕事をしながらの作業は大変なご苦勞であったと推察される。また、当時は手書きで全て郵送していたため、現在では想像できない仕事量であったのではないかと費用面の問題もあったと聞きました。



*故廣長威彦(ひろなが たけひこ)氏

英国の「大英博物館」に木版画2作品が所蔵されている福島県郡山市の画家
本校一期卒 在学時 桜朶を刊行 題字は廣長氏の自筆 令和3年(2021)85歳にて永眠
その後のエピソードは桜朶20号に掲載

7号復刊から34年の月日が経ち、平成22年[2010]7月30日❀桜朶第8号が復刊されることとなる。

❀桜朶復刊までの経緯

母校からの郵便?…嬉しいけどまた寄付金!…なんとかならないの 同窓会!! 当時の同窓会の状況…名簿整理管理、会報誌発行、HP立ち上げ 急務!!!

本校の野球部甲子園出場は全8回。昭和62年の初出場、3年後の平成2年、そして平成8年から3年連続出場、また3年後の平成14年から2年連続出場というめざましい活躍で、本校の名前を全国に知らしめてくれた。

当時、同窓会の担当は、名簿の管理と寄付金の案内状作成・郵送が主であった。

同窓生は62年当時で2万人を超えており、(現在は3万9000人を超える)それまで、このような大規模な名簿利用はなく、その管理整理は十分であったとはいえず、宛先不明などで大量に返信される状態であった。お礼状や記念誌の発送の遅れも…当時は母校からの郵送物は無く、この寄付の案内だけが届く状態であった。回を増すにつれ、同窓会への厳しい意見も聞かれるようになった。

過去の同窓会資料を振り返ると、このことは大きな問題として議題に上っていた。

時代の流れで、個人情報保護法が施行され、平成12年度で名簿発行はストップ状態。この名簿の整理および管理、同窓生と母校をつなぐ会報誌、ホームページの開設の必要性が強まり、具体策の検討が数年続いた。そして、学校の広報部と連携し、まずは年3回発行されている広報誌の記事をもとに、再編集した会報誌の発行が同窓会役員会そして総会にて承認された。当時、私は事務局次長であり、この担当となった。早速、広報担当教員と連携をはかった。主任渡邊弘幸教諭と広報誌担当土屋秀夫教諭から、本校でも以前会報誌を発行していたことを伺い、実物の存在をみることに出来た。(詳細は後述するが、土屋教諭は本校50年史の中心人物であり、その編纂の際、会報誌をすべて集めてくださっていた)

復刊が決まった!!記事集めから校了までの長い道のり 名簿の完成のためにも「3年は続ける!」を目標にスタート

～大変な作業であるが、辛いと思うことや、嫌だと思うことはなかった～

❀1 まずは創刊者廣長氏に面会

廣長氏は上述の通り画家として活躍されており、毎年個展を開催、同窓会に案内を頂いていた。祝花を贈呈していたこともあり、親交があった。

当時の事務局長 故石川信義先生と個展に伺い、桜朶を復刊することを告げ、廣長氏の自筆の題字利用をお願いしたところ、快く承諾してくださった。現代風に自由に変えて良いとも仰ってくださったが、とても素敵な字体なので横に向きを変えることのみご了承いただいた。その後も、アトリエに招待されるなど、後輩思いの廣長氏には大変よくしていただいた。

復刊号には、廣長氏に「桜朶」-創刊の懐旧と題し、寄稿していただいた。



❀2 記事収集・編集、名簿の整理

広報部にて、広報誌を担当していた経験を活かし臨んだが、それまで定型があった広報誌と違い、ゼロからのスタートであった。ページ数、記事の内容、紙の厚さ、郵送方法・費用など、共栄印刷 大沼氏の多大なるサポートに大変感謝している。

さらに、この事業は2万人を超える本校同窓生の名簿を確実なものにしていくことも兼ねていたので、名簿管理専門の業者との対応まで行った。正確な名簿にするには最低3回の往復が必要とのこと。まずは3年続けることを目標とした。

これを機に、同窓会のホームページも立ち上げた。少しずつ新しい同窓会が動き始めた。

❀「本校50年史」の功績に幾度となく感謝しながら❀

平成13年本校は50周年を迎えた。その際、刊行された「本校50年史」がバイブルであった。



本校50年史

本校は30周年誌を発行して20年の月日が流れていた。当時の編集チーフ土屋秀夫教諭が、現存する(散在する)、本校のあらゆる資料、アルバム、学校誌などの刊行物、制服やバッジなどの、すべてを一つの場所(当時の3号館3階*記念誌編集室・史料展示室)に集めてくださった。

また多くの卒業生に呼びかけ、懐かしい物品を寄贈していただいたり、貴重な体験談や記憶をたどり、本校の50年を綴ってくださった。

本校の設置認可証もここに保管された。あらゆる行事の写真・ネガもすべてファイリングしてあった。元建築科教諭 故古橋栄吉先生による校舎の模型も展示されていた。

桜朶も創刊号から7号まで、すべて集めてくださっていた。このご苦勞がなければ、桜朶の復刊は難しかったと思う。この多大な功績への感謝の念は決して薄れていません。

*記念誌編集室・史料展示室

当時の3号館3階、平成22年まで存在していた。

ここに来れば、学校の歴史や現存する過去の刊行物をすべて見る事が出来る場所であったが、その後、同室を生徒の自学室とするため縮小され、展示室はなくなってしまった…

❀ついに34年のブランクを経て 念願叶っての復刊 ～平成22年2010年7月30日(第8号)復刊～

多くの方のご協力を頂き、平成22年[2010年]7月30日❀桜朶❀(第8号)を復刊させることができました。まずは同窓生に母校の今を伝えるため広報誌の記事を利用させていただきました。そして桜朶の生みの親である廣長氏に寄稿していただき、各支部の様子や、来校された先輩方の記事を載せることができました。同窓会の悲願であった同窓生と母校を繋ぐツールを復刊して送れたことはとてもうれしかった。



☆うれしかった同窓生からの反響☆



100通を超えるほどたくさんの返信はがきが届いた。

「母校とつながった」

「母校の様子がわかってうれしい」

「母校を訪問したい」

「恩師の喜寿のお祝いをしたい」

「卒業生の活躍を孫に自慢しています」……

記事の感想や、同窓会の発展のためにと意見をくださる。毎回必ず返信してくださる方もいる。いただいた意見や情報をもとに次第に形式が出来ていった。記事を投稿してくださる方も増えてきた。

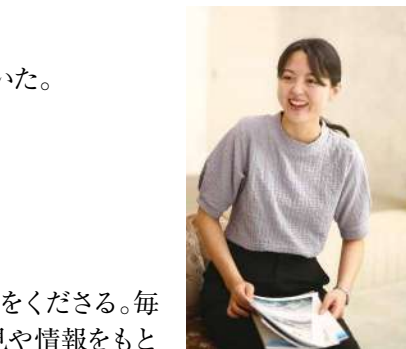
各支部の総会での生の反響が嬉しかった

各支部の総会には可能な限り参加させて頂き、多くの貴重なお話を伺ったり、桜朶の話になったり、次第に先輩方を身近に感じる

ようになりました。世代もまちまちなのに、あたかも同じ学舎で学んでいたかのような不思議な感覚に包まれたことが何度もありました。

大変な作業ではあるが、辛いと思うことや、嫌だと思うことはありませんでした。むしろ多くの先輩たちと繋がれること、そしてその頑張っている(きた)ことを直に伺える素晴らしい経験をさせていただけたと感謝しています。

それらは私の財産となりました。



❀桜朶の継続 約束の3年が過ぎて…

～あらゆる事業を工夫(縮小)しても、桜朶だけは続けていこう～

ホームページの同時開設は、印刷・製本・配送に大変な費用がかかるということを予測し、3年後冊子の発送が困難になることを見越した発案でした。(ホームページに記事をあげて、皆さんに見てもらえたら良いという考えであった。)



約束の3年目…総会前の役員会

多くの予算がかかります。どんどん卒業生が増えていきます。どうしましょう？

「あらゆる事業を縮小しても❀桜朶は続けよう」(これは残そう！)

これが当時の故柳沼正人同窓会長はじめ、役員会の総意であった。

❀桜朶があるから電話をかけたり電話が来たり、クラス会をやろうとか、❀桜朶を媒体にして着実に同窓生の輪が広がっている。

費用について、単年度では赤字になるような会計処理になってしまうが、同窓会には先輩方の残してくれた備蓄がある。これまでの先輩方にお返しをするチャンスとして考えては良いのではないか？

こうして桜朶の歴史は続いていくことになる。

色々な先輩が情報をくださる中で、恩師との話題も数多く耳にしたので、退職教員のインタビューを記事にするコーナーを設けたところ多くの反響をいただいた。新聞で先輩方の受章などを調べ掲載させていただいたり、後輩の役員のアイデアでいくつか企画ものをやってみたり、同僚の先生方からも、こんな卒業生がいるから、とインタビューに飛び回った。とにかく少しでも多くの同窓生に関わってもらいたい。

そして、本部を中心に全国に広がった支部が桜の枝垂れのように繋がっていった欲しいという廣長氏の初心の思いを継ぐように。

～月日は流れて少しずつ桜朶が広まっていく 桜の枝垂れのように～

同窓生のパワーを体感した60周年式典

みんな気づいていなかった同窓会50周年式典～桜朶が復刊されてからの60周年式典

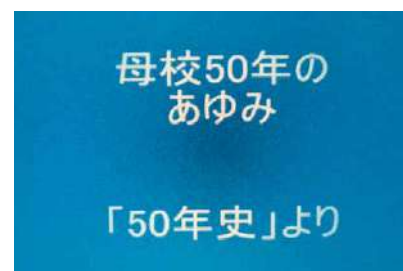
同窓会50周年式典(平成17年 2005年10月7日)

この年の春の役員会、「学校の50周年が3年前にあったが、同窓会50周年やらないの？」役員会終盤の雑談の中発せられたこの言葉で準備が始まった。

とても慌ただしい中、支部を中心に参加者を募り、式典は(盛況に)開催できた。気遣ったことは、式典会場の看板下に東北工業高校時代の校旗と、現在の校旗を連ねて吊るしたこと。多くの参加者が東北工業高校時代の先輩方であることを意識した。

もう一つ、「母校50年のあゆみ」という動画制作に挑戦した。

50年史の記事をたくさん利用させていただいた。この動画は、その後先輩方が来校されるたびに上映し、昔を懐かしく思い出すツールとなった。この50周年式典を反省し、60周年に向けて積み立てをしていった。



60周年式典

明らかに各支部の方との距離が縮まり、アットホームで活気に満ちた役員会

来た方をすべてを笑顔で帰したい!を心の合い言葉に開催(平成27年 2015年10月2日)

桜朶復刊から5年が過ぎ、すっかり同窓会誌「桜朶」があることが定着してきた頃の式典開催。

事務局長を仰せつかっており、重責を感じていましたが、桜朶を通して各支部との繋がりが確実に強固となっており、和やか且つ、活気に満ちたムードで役員会が進められていったのを覚えています。



その中で、これまで発行された桜朶の縮刷版を引き出物とするのはどうかという案が出た。すぐに費用の問題が気になったが、印刷業者さんからの「広告を集めてはどうか？」の提案に、役員の皆さんが即賛同してくださった。



ここで驚愕の事態が起きました 同窓生のパワーはすごい！！

一ヶ月程度の期間に100を超える先輩方からの広告提供があり、印刷製本代を優に賄うことができ、余剰金まで発生しました。さらに、式典当日も、お声がけ出来なかった、多くの先輩方から、自分のところも協賛したかったとの声をいただきました。この余剰金を上乗せし、余興では盛大なハズレなしの大抽選会を開催できました。

同窓生の皆様、広告集めに奔走してくださった役員の皆様、広告掲載の段取りをしてくださった印刷業者様、会場準備から運営まで協力してくださった同窓生の皆様に感謝です。

華やかな、素晴らしい記念式典を開催できました。

もうひとつ、ここで1号から7号までを網羅した桜朶の縮刷版を発行できたのは、整然と整理された記念誌編集室があり、原本をお借りできたからです。改めて感謝致します。



平成から令和へ ❀ 桜朶は続いていく 多難を乗り越えて

この後も毎年、桜朶の発行を続けていきました。学校も様変わりしていきました。グラウンドの人工芝生化、新校舎の設立、新しい時代がやってきました。

また、平成29年1月に桜朶の復刊からご支援くださった柳沼会長がご逝去され、深い悲しみの中、同窓会も新しい時代に突入していきました。新しい試みとして、各支部から桜朶編集委員を募り、さらに輪を広げていこうとしました。しかしながら皆様ご多忙の中、編集会議も開くことが困難で、頓挫して仕舞いました。このとき、改めて廣長氏や寺田氏のご苦勞を痛感致しました。

こちらの諸事情により、発行が遅れた年もありました。あのときは、「今年は届かないが何かあったのか？」と心配の連絡を多数いただきました。毎年、桜朶を待ってくださっている方がいらっしゃることを改めて実感し、号を重ねていくことが出来ました。

同窓生の皆様の温かい言葉に感謝しています。



一度だけ開催された編集会議

新校舎完成… 水害… 大切な史料が失われていく

桜朶が18号を迎える頃、令和の時代となり、新校舎の完成が目前となり、グラウンドは人工芝生化され、ナイター設備も完備されました。本館とアカシヤ館、2つの体育館を残し、まず3号館（記念誌の史料が収納されている校舎）から取り壊しがはじまり、史料はすべて大学の校舎に仮移動されました。懐かしい銀杏たち（桜朶22号の表紙）ともお別れになりました。

3号館2階には、小さなスペースですが同窓会室もありました。

まもなく新校舎完成という年の秋に台風が直撃し、徳定地区一帯が大洪水の被害を受けました。教室や本館、第一体育館、アカシヤ館も床上浸水となり、汚水のため、しばらく休校となりました。

本校としては未曾有の水害で、とくに受験出願を控えている3年生にとっては大打撃でした。教員室も機能しなくなり、仮の教員室を大学に設置対応していました。

このあと、大学の校舎も汚水浸水被害を受け、そこに保管されていた記念誌等の史料も大変なことになるという話を耳にしました。

見に行くと貴重な史料が汚物のように山積みになっていました。心に穴が開いたようでした。

残念なことに、50周年記念終了後は、形式的な管理委員会しか存在しておらず、編纂展示室も自学室になり、大切な史料は奥の小さな空間に押し込んだ状態となっていました。

さらに3.11の大震災で保管戸棚類が壊れ、未整理の状態でした。この状態でバラバラに運び出された史料を新校舎で整理し直すこともできず、すべて失ってしまったのです。

今となっては50年史で取り込まれたデータが唯一残された本校の史料となっています。

桜朶の原本も水浸しとなり手がつけれない状態でした。60周年式典で縮刷版を作らなければ多くの皆さんの目に止まらないまま伝説として消えてしまうところでした。

たくさん反省すべきと痛感した

本校50年史を制作後、土屋教諭は、次の10年20年後に誰が中心でどのような記念誌を創るかわからないが、基本となる資料（史料）はほぼ集めて、保管場所もつくってあるので、毎年、定期的に発行する刊行物や、新聞、写真などをきちんと続けて集めていけば、今回のような苦労をしないで済むということを仰っていた記憶がある。



今は掛ける場所を失った
事務局看板



史料展示室のあった空間
（解体直前に撮影）



当時の記念誌編纂室
文化祭（アカシヤ祭）一般公開にて



当時の被害状況の映像を見ながら



2号館からみた懐かしい風景

こんなに広い土地がある学校で、母校の記録、史料をきちんと保存しておくことがなぜ出来なかったのか、悔やまれてならない。

現在も史料を整理・保管できる空間は存在していない

これからの❀桜朶❀と同窓会のために

これまでの活動は若い方々にはどのように映っているのだろうか？

高橋先生から大山先生への質問

男子校からスタートしたので、同窓生は男性が多く、記事も男性の方がほとんど。

といっても平成元年に共学化となり、Ⅱコースも併設され30年の月日が流れました。

ここまで無我夢中でやってきましたが 若い先生方、女性の先生方からみて桜朶は、また同窓会はどのように映っているのか伺いたい。



大山先生からみた ❀桜朶❀同窓会

**こんなすごい卒業生がたくさんいらっしゃる！
同じ高校であることをとても誇りに思います。**



最初は硬い内容が多く、工業高校時代の様子はわからないので、違う学校のころのように思っていました。桜朶に関わるようになり、流れやつながりがわかってくる中で、遠いと思っていたものが、そんなに遠い話ではないように感じている。自分が生徒の時に過ごしてきた空間は、(私の場合だと母校で働いているのですが)、その先輩たちからずっと変わらないものであり、校舎とか制服は変わっても、そこで過ごした同じ日大東北高校生であるという繋がりを感じます。

じつは正直にいうと、卒業生ですごい有名人がいるイメージがなかったので、桜朶の取材で、インタビューさせていただいたり、過去の桜朶を拝読して、すごい功績をお持ちの卒業生がたくさんいることを知り、母校が同じであることを誇りに思うようになりました。

女性の方の記事が少ない印象はありますが

おそらく女性の方でも活躍してる方が沢山いらっしゃると思うので、そういった方を紹介できるといいと思いました。特別に大きな記事ではなくても沢山の方を紹介できれば、多くの方に興味を持って見てもらえるように感じています。

公式LINEになるとどんどん書き込みができるようになっていく

公式LINEを活用していくことで、多くの方から情報をもらえることを期待しています。

仲間を集って、この桜朶と同窓会の歴史を絶やさないようにしたいと思いました。

少子化の時代において母校の広報活動にもつながっているのではと思う

同窓生が頑張っている姿を伝えることが出来る 素敵な学校のアピールになる

今、広報部を担当していて、同窓会誌(桜朶)はすごく大切なものだと感じています。

多くの先輩たちの活躍を紹介し、母校の良さを伝えることが出来る。現在も同窓生のご子女の方にたくさん入学していただいているのが嬉しいです。これからも同窓生の力が次の世代につながっていき、それによって学校が存続していく一助となれたら素敵です。

大山先生自身高校時代書道部に所属しておられて 今教員となって戻って来られて休部になってしまっていた書道部を愛好会から復活させたことに関する記事になるのでは？

自分の高校時代は、書道部に所属していました。ちょうど愛好会から部になった頃で、愛好会時代の大変だった話を先輩からよく聞いていました。その後休部となり、寂しかったのですが、やってみたいという生徒が少しずつ集まってくれて、今は愛好会として活動しています。

多くの生徒に素敵な思い出の場所を提供してあげたいし、こんな風に頑張っていたという生徒がいたことをきちんと記録に残したいので、桜朶を開くと頑張っていた頃の思い出が甦るようなページを作っていけたらいいと思います。

高橋敏行先生 今年度ご定年を迎えるに当たり

同窓生を大切に作る学校には“未来”がある

同窓生がいつでも来られる学校であって欲しい

❁「同窓会」と「桜朶」のこれまでとこれから

事務局に長く携わって

多くの同窓生にきちんと還元していきたい、そしてつながっていききたい、という思いで務めてきた

❁1 同窓会費を納めてくださった卒業生の皆様や在校生の皆様にとどのように還元していくか？

- ①桜朶の発行継続
- ②各賞の新設
学業努力賞 スポーツ文化功労省 三世代賞
- ③学年ごとの現役生徒への還元
入学式の記念撮影、修学旅行の記念写真、卒業記念品の工夫
- ④学校を綺麗に…故柳沼正人会長からの継承
掃除機や教室の大きな時計の寄附
各教室や共有スペースへの花寄贈



計画途中で出来なかったこともあったし、出来なくなってしまうこともあった。三世代賞はもうすぐ四世代賞になっていくのでは？

20歳のお祝いをしてあげたいとか、40歳のお祝いをしてあげたいとか、60歳のお祝いをしてあげたいとかいろんなお祝いを考えたことがあるが、よく考えると、毎年数回お祝いの会を催さなくてはならなくなってしまう、これは、なかなか難しい。実現しなかったひとつの案。

とにかく、幅広い年代の同窓生が集える会を催したかった。ほかにもいろいろ…

❁2 桜朶を続けてきて… 廣長氏の桜朶という名前に秘められた思いを実現化していきたい

本部を中心に全国に広がった支部が桜の枝垂れのように繋がって欲しい

8号の復刊の際の編集後記にも書きましたが、桜朶の名前に込められた廣長先生の思い通り、卒業生と学校をつなぐことができるようにしていきたい。いい時も辛い時も母校があり先生がいる。青春時代を友や仲間と過ごした場所がある。そして桜朶がその一翼を担うツールであって欲しい。

桜朶で伝えたかったこと

- ①同窓生に対して……高校時代を懐かしんで欲しい
例として、退職された先生方にインタビューをしていく記事…以前掲載した際、反響が大きかった
- ②在校生に対して……どんな先輩がいて どんな高校生活を送っていたか知って欲しい
社会で活躍している先輩のことを知って、その先輩がどんな高校生活を送っていたか
日大東北の今と昔を知って欲しい
心をふるわせ、泣き喚き、そして歓喜する。でも最後にやってよかったって、成功体験になる。
そういう高校生活を送ってみたいという風に思っただけから

時代の流れ デジタル化の波に抗えず

物価の高騰 印刷代、高額な郵送費 時代の変化 避けられない現実

次号から、桜朶はデジタル化し、紙媒体は希望者のみとなる。前号にて、この告知をし、紙媒体を望む方は？と希望を募ったところ、100名を越える方より希望をいただいた。

なかには、「冊子として存在しているから、いつでも見られるのであって、デジタルで存在しているとしても、そこにアクセスしなければ見ることが出来ないということは、存在していないのと同じ。」などと強い要望もあった。また、昨年逝去された同窓生の奥様より、「毎年桜朶を楽しみにしていた主人の仏前に供えたいので送ってほしい。」というようなお便りもいただき、目頭が熱くなりました。時代は変化し、デジタル化の波は停まることはないでしょう。今回改めて、桜朶を必要とくださる方々がいらっしゃることに、感謝の気持ちと、ここまで続けてきて良かったと実感しました。この期間に多くの同窓生との出会いがあったこと、これが最高の財産です

最後に次世代の 同窓会と桜朶のこれからについて 託したい夢

同窓生がいつでも来られて、当時を振り返られる「空間」とその「きっかけ」を作りたいかった

❁同窓会館を作りたいかった

私が事務局になる以前から、多くの構想はあったようだが、維持管理の問題等解決しないまま話は頓挫してしまっている。現役生徒が有効利用できる空間と、同窓会の歴史がわかる資料室、会議も出来たり。そして、同窓生がいつでも来校して当時を懐かしむことができる空間…(他校には無いような)

博物館にあるようなタッチパネルで当時の記録が見られるようにしたかった

同窓会の保存している記録をすべてデータ化してタッチパネル式情報端末のような設備を作りたいかった。

母校には若返りのパワーがあるから

多くの先輩方の来校時、いつもすすんで私が学内外を案内しました。

はじめは来校までの疲労感を表に出す方が多いのですが、校舎を見学したり、昔話をしたり、昔(当時)の映像を見たりしていくうちに“少年のような澄んだ目の輝きに変わっていく瞬間”を幾度となく目の当たりにしてきました。

これが母校の力、母校の与える力のすごさ。当時、15歳から18歳という多感な時期を過ごした場所なので、何歳になっても母校にくるとその感覚が戻る。思い出が蘇る。

同窓会の流れで来校した先輩の中には「寿命が数年延びた!」と言ってくださる方もいらして、母校のありがたさ、母校のパワーを痛感しました。

そういう空間を作りたいかった。



懐かしい実習工場
見学

長い人生。いい時も悪い時もあって、同窓会があっても、参加しにくいとか、ちょっと距離を置きたいと思う時もあるかもしれない。でも辛い時こそ、この高校時代に色々な思い出があれば、(自分では感じていなくても、高校3年間って人生において大きく変化する時期だから)その頃に戻れるような。そんな思い出を作れる学校であって欲しいし、同窓会ができたらいと思っています。そんなとき、「桜朶」が母校というか、高校時代を思い出すチャンスになってなんか集まりたいとか、学校に行ってみたいとか、そんな風に思えるツールであってほしい。ひとりでも多くの方が関わって、繋がりが広がって行って欲しい。どんどん同窓生とつながっていききたい 同窓会やったでもいいし…



恩師小松先生の喜寿、還暦祝賀を兼ねた同窓会で来校された25期の先輩方

さくらのしだれのように

高橋敏行 教諭
❁桜朶編集部長
国語科教諭



大山友希奈 教諭
❁桜朶編集部員
芸術・国語科教諭

2025.7.31 国分スタジオにて

同窓会創設70周年を迎え

Special Thanks

これまで様々な形で❁桜朶を支えてくださったすべての方々へ
感謝の気持ちを込めて

～桜朶の下に～

作詩：阿部 正栄 作曲：高橋 敏行



Chords: C, Am, F, G, C, C, Am, F, G, C, Am, G7, C, Am, F, G, C, Am, Em, F, G, C, C7, F, G, E7, Am, F, G7, C

6 10 13 16 20

みちのくふるさと うかぶ ぼこうははながすみ
つうがくろの がんたらばしで かわもにうかぶ
さかなに 自分を見つけ アカシヤばやしで さぐ
る しこうはじまりの かぜ... かぜとゆききすると聞
こえてくる さとすこえ... しまったげきれいの じょうねつ じょ
うねつは おおぞらに ひろがり こうしゃにそそぐ



音・美・書 芸術系3教科が解説する「青春セレブ」

～キャンパス・五線譜・半紙の上で『贅沢』な青春を語る～

高校の競技かるた部を題材にした『ちはやふる』という映画3部作公開から10年が過ぎ、今夏、その10年後を描いたテレビドラマ『ちはやふる-めぐり-』が放送されました。ドラマ内で令和の高校生が発した「青春セレブ」というキーワードは現代社会を投影し、ドラマのテーマを象徴する言葉として注目されました。

この作品を通して、改めて部活動の意義や顧問の役割などについて、同じ芸術科の最も身近なお二人をお迎えし、特別企画として、お話を場をセッティングさせていただきました。

青春セレブとは？ 三人の先生方の青春時代と青春セレブ



美術 菅野智子先生 音楽 成瀬鮎見先生 書道 大山友希奈先生

ヒロインのめぐりは中学受験を失敗し、青春は贅沢品で、FIRE(早期離脱)をめざしている高校生。そこで高校時代をカルタに捧げ、青春を謳歌(青春セレブな体験)した顧問の奏先生と出会い、物語が展開します。

大山先生が最近出会った とある高校生の話

先日、アンサンブルコンテストのお手伝いの際、他校の1年生男子生徒に「部活は1年で辞めて2年からはバイトする」と言われました。彼はコンテストメンバーに選ばれるほどの実力があり、私は高校時代にしかできない経験の貴重さを伝えようと思いました。お金も大事ですが、時間を忘れて1つのことに打ち込める経験こそ、今しか得られない価値ではないかと話しました。しかし、この思いは彼には伝わらず、あまり響かなかった、というのが正直な感想です。

うまく伝える言葉を持っていない

「今の時間がいかに尊いか」は、生徒たちに伝えたい核心的なメッセージです。しかし、短時間で伝わることは稀で、私たち自身がその価値を知っていても、その目線で語りかけても、なかなか生徒の心には響かないと感じます。

大学の恩師に「世の中の主役は子ども」「大人は子どもが生き生き育つための環境をつくる菌草」と言われたことがあります。

社会の状況や、子どもを取り巻く環境が変わってきていると感じます。将来に向けた積み立ての意味の捉え方とか。(菅野先生)

スマホでみんな答えが返ってくる それは疑似体験

スマートフォンが何でも答えてくれるので、わかったような気になり安心してしまふ。それは疑似体験に過ぎず、部活動のように毎日継続し、揉まれながら信頼関係を築いていく、報われない経験も含め、この実体験こそが人を成長させる尊い時間だと感じます。が、わかってほしいですね。(成瀬先生)

三人の先生方の「青春セレブ」な学生時代



菅野先生 サボれる美術部～だんだん絵を描くことが楽しくなっていった

中学生の頃、サボれるからという理由で美術部に入り、悪いことばかりしていました。反抗心は静かに持ちつつ、社会を敵だと思っていました。冬には教室に雪を持ち込んで雪合戦をするような有様でした。途中から担当の先生が変わり、怖い人だったらどうしようと、チキンな私は、先生がいる間だけデッサンするふりを続けました。そのうち、ふりを続けるのが面倒になり、なんとなく絵を描き続けているうちに、絵を描くことが楽しくなっていったんです。

だんだんと図法やデッサンの時の攻略法を自分で大発見したようなつもりで、カンニングのようにやっていましたが、先生に「そんな世の中にもうあるよ」と言われてしまい、ちょっと悔しくもありましたが、必要が生じる人間は工夫するんだと感じました。

大学時代は、芸術棟によくもっていましたね。1つの作品に何日もかけて、納得するまでやり直す日々。夜を徹して作業したことも、一度や二度じゃなかったです。『ちはやふる』みたいな、いつもみんなでワイワイしながらも切磋琢磨する感じとはちょっと違いました。ライバルとして「いかに先輩を超えてやろう」という静かな闘志の方が強かったですね。たまに展覧会なんかで交差するくらいで、でもその距離感が意外と心地よかったんです。

成瀬先生 多くの「出会い」と「挫折のエネルギー」が原動力に

実は、親の転勤で転校が多くて、いろいろな学校での吹奏楽部の活動経験から、個人で努力しても団体全員の意識が高まらないと成果が出ないという集団の難しさを学びました。自分の力ではどうにもならないことがあると痛感しました。高校時代は、その反動から「何でもやってみよう」とがむしゃらに挑戦し、先輩にも積極的に意見を言う経験を積みました。大学生になり、その頃を客観視すると恥ずかしくも感じましたが、思いっきりやった経験は今に生きています。失敗とか悔しさとか、怒りといった「挫折のエネルギー」って原動力となり、人を成長させる「そう」いった大切な姿勢を、私は部活動や音楽から学びました。



大山先生 恩師(故佐藤久雄先生)との出会い「コピー機だね」から「1枚1枚試行錯誤していく」に

小学校から習字を続け、高校で「芸術の書道」に出会い、その面白さに目覚めました。ちょうど震災の年で、秋頃、何もない毎日がつまらなくて、「もうちょっとなんか高校生っぽいことしたいなって思って」バレー部か書道部か迷い、書道パフォーマンスも流行っていたので入部しました。当時の仲間とは今でも交流があります。先輩方は優秀で、先生からずいぶん叱咤激励されたことを覚えています。

毎日部活の最後に、今日書いた作品を全部並べて、先生にチェックしてもらおうのですが、その時に「うーん コピー機だね」自分のものとして書いてないものはコピー機と同じだよ。……「あたしの今日の2時間はなんだったの？」

きちんと1枚1枚全部違うものとして、これはどこが出来て、どこが出来ていないのかってことを、きちんと見極めていくことが大事だと思い知らされたんです。この精神が今でも、私の指導の根幹にあります。恩師との出会いに感謝しています。



当時の部活の様子

なぜ今、「青春セリブ」という題材がドラマになったのか？

「桜朶」では、活躍する卒業生の記事が掲載されていて、お目にかかったことがない先輩でも、嬉しく思うことがあります。その反面、世の中では大学卒業後、就職した方の早期離職率の問題など、暗い話もあります。これに歯止めをかけようとする新たな動きもあるようです。間接的に、高校時代にどのような経験が出来たのかと関わっているのでは？



高校卒業…上級学校進学…その後のこと

現代社会の問題点と新たな動き「青田買い」～「青田創り」の時代へ 企業と大学が連携し人材の育成へ

青田創り 次世代を担う人材を学生のうちから育てていこうとする企業と教育機関が連携した活動
高校から大学、大学から企業へ就職、企業の採用と育成、人事と職場が分断している状況を修正するためのプロジェクト
分断している人材を育む場を、きちんとつなげていくことが急務
——私たちは、AIが台頭してくる時代に企業が求める人材像を意識した教育活動ができていますのでしょうか？

もう1つの問題点

付属高校推薦入試と「ドラゴン桜」や「ビリギャル」から思うこと

ドラゴン桜やビリギャルに共通する世界観は受験を通して本当の勉強の楽しさを伝えていること

「勉強すればするほどもっといろんなこと知りくなった」「世の中のこと正しく読めるようになっていった」はドラゴン桜最終回の印象的なセリフのひとつ

——本校生の多くは、恵まれた推薦入試制度を利用し進路が決まっていく。上級学校へ進学した後のことが気掛かり。

物語の核心部

～ かるたで宝物を見つけられた人には、その10年先に必ず明るい未来が待っているって私に見せてください ～

かるた部顧問 奏先生の実体験を元にした10年後のエビデンスは？

自分は知らないうちに、かるたに身を尽くすことで積み立てていた。はじめはただの石ころだったかもしれない自分が、次第に磨かれて、10年経った今ではどんな高価な宝石よりも輝いている。あの3年間を思い出すと、自分は何度でも立ち上がれるような気がする。かるたじゃなくてもいい。めぐるさんにも、そういうものを見つけて欲しい。

それがきっと未来のあなたを支えるかけがえのない宝物になる 10年後も もしかしら100年後だって

私たちのエビデンスは？ 文化部の大会で私たちが磨いてきたものは？

文化部の戦い方から得たもの ～審査員の好みにより評価される勝負で、勝利の栄冠をつかむためには～

☆文化部の大会って運動部と違いますよね。何人が審査員がいて、その審査員の主観を集めて点数化した平均が評価になるじゃないですか？

そういう曖昧な競技ですけど、成果が出るような指導はしたい(成瀬先生)

☆どういうふうに表示したら、どういう風に受け取ってもらえるんだろうって考えるのはなかなか難しいんですけど、やはり評価してもらおうと、なんでこれがダメなんだろう？ どういう好みなんだろう？ どこが気に入るんだろう？ とか(大山先生)

☆美術もあります。タッチとか傾向とかありますよね(菅野先生)

文化部の活動が育む「生きる力、正解のない問題に諦めず取り組む姿勢」

私たち文化部の顧問は、勝敗が明確ではない特殊な採点方式の世界に身を置いています。だからこそ、この経験を通じて生徒たちに与えられる「生きる力」があると思います。

文化部の活動は、常に新しいものを生み出す世界の想像力の勝負です。技術を追求し、審査員先生方の度肝を抜くための計画性、表現力、協調性、創意工夫の力を総合的に育みます。正解のない問題に直面しても諦めず取り組む姿勢こそが、社会に出てからも、最も不可欠な資質だと思います。

私たちの活動はそれを目指しています。こうした力を体得した生徒たちが主体性を持って力強く行動する姿こそが、未来を生き抜く「生きる力」につながっていくのだと確信しています。指導の根底にあるのは、顧問の強い信念と姿勢です。

「ゼロからは何も生まれません。私たち顧問は、生徒たちよりも少し先を知っている存在として、まずは私たち自身が『強い風』を起こします。その風に乗って、活動が膨らんでいくようなイメージで、結果として、生徒たちの中から自主性や主体性が生まれてきます。そのためには、私たち自身も常に勉強し、生徒の皆さんと一緒に向上していかなければなりません。

文化部での経験を通じて培われたこうした力が、卒業後の未来を生き抜く糧となっていることを祈っています。



ドラマや映画、フィクションから素直に学ぶ 理想の世界と嘲笑わずに

ドラマの話題を中心に話していますが、ドラマには、われわれがこのフィクションから学び、現実を生き抜くために最も大事なメッセージが込められていると思います。ドラマの世界を「非現実の世界のこと」と分けてしまわずに、このメッセージを真摯に受け止め、少しでも現実の現場に活かしていけたらと思っています。学校ってドラマチックなことがたくさん経験できる場所であってほしいです。

「ちはやふる」「表参道高校合唱部」「ブルーピリオド」「書道ガールズ」「かくかくしかじか」…また、「ドラゴン桜」や「ビリギャル」…の世界も。多くのドラマチックな成功例から素直に学んでいきたい。

ゼロから1を生み出すペップトークの力「先に生まれただけの僕」第5話より(2017年10月)

生徒によるオープンキャンパス開催のエピソード

会社員で出向中の校長先生(企業の論理を学校に当てはめ改革を進めている)の呼びかけや、担任の先生のペップトーク(ネガティブな要素をポジティブに言い換える話法)により刺激を受けた生徒たちが、自分の学校をよく見てもらおうという想いを胸に活動を始め、結果的に青春セリブのような経験ができたというお話。(書道パフォーマンスを中心に、自分たちの学校は変わっていくと自信を持ってアピールするシーンは圧巻です)

本気になれない(自分に自信が持てず、過小評価してしまう)生徒達を奮い立たせる呼びかけ(ペップトーク)から、生徒達は当事者意識に目覚め、積極的かつ自発的に活動し、オープンキャンパスを成功させた例。

現代の生徒達に、どのように働きかけたら(声掛けしたら)良いか考えさせられる番組でした。

「なんで出来ないんだ」→「これが出来るようになったら気持ちいいだろうな」…



現在の芸術の授業・部活動 AI時代における芸術授業の必要性

AIデジタル時代における、体で生み出すことの価値

AIやデジタル技術が進化する中であえてアナログな表現、未知の世界を体験してほしい。
知らないジャンルの音楽を聴いたり、多彩な素材に触れたり、様々な字体で表現したり。



芸術教室は新館3階にあります。中央のオープンスペースにはグランドピアノがあり、休み時間、放課後、生徒達が自由な音色を奏でています。

生徒達は、新校舎において、このような環境で芸術の授業を通して感性を育んでいます。

芸術活動が生み出した新たな伝統の始まり

合唱部の指導方法大転換 1人1人が全力で発する声から「新たなハーモニー」へ



先日、声楽の指導の先生をお呼びしたときの話なのですが、合唱部って声を揃えるじゃないですか。周りとか合わせなきゃいけない。ある意味自分を隠すっていうか、抑えなきゃいけないみたいな感じの部分ってあると思うのですが、その先生の指導は真逆でした。「まずは、みんながしっかり声を出して、その声がブレンドして新しいハーモニーが生まれる」「さあ、思いっきり声を出してみよう」そしたら生徒たちからビックリするぐらい大きな声が出てきて、ものすごく楽しそうで、思いっきり歌っていいんだって自信が持てたのかこんなに生き生きするんだって。今そういう方向に転換してるんです。私の理念も考え方も大きく変わりました。

実は私も色々思うところがあったんです。例えば、ドラマ「表参道高校合唱部」のように、あまりにも音程が合わない場合に口パクを指導する学校もあると聞きます。でも、そうではなくて、苦手なところがある子がいれば、周りが補えばいい。「これが本当のチームプレーなのかな」って。無理に合わせるより、まずは1人1人が自分の声を出してみる。バラバラになるかと思いきや逆に合っていくんです、不思議なこと。「ハーモニーを壊したらどうしよう」って気にしすぎると楽しくないんですよね。思いっきり全力を出して、それを合わせる練習をすることが大事なんだって思ったんです。

すごい大発見でした。



美術と書道のコラボレーション 水墨画に目覚めた美術部員と友人の書道愛好会員

「じゃあコラボしよう」で始まった夢の空間

2年前からアカシヤ祭で美術部と書道愛好会の生徒達のコラボパフォーマンスが始まり、恒例イベントになりつつあります。

AI時代にディスカッション

このイベント開催に向け、生徒達は多くのディスカッションを重ねました。未熟な者同士がディスカッションして成長していく。そういう経験をした人が大人になって職場に行ったら、その良い空気を広げていけるんじゃないかなって思うんです。

生徒もよく利用しているAIは答えを出してくれますが、実感や思いがない。だからこそ、やはり人間同士で、学校でしかできない学びをしっかりとやっていきたいと再確認しました。そして高校時代のかげがえのない思い出を作ることができました。

伝統みたいな感じで受け継ぎたいとか先輩たちのやっているのを見て私もそれがやりたくて入ったとか、そういう憧れが出るっていうのがいいなと思います。生徒たちは本当は、ああいう高校生らしさを求めている気がします。大山先生が「高校生っぽいことしたい」と思ったように、皆どこかでこの気持ちを持っていると思います。人と気持ちを通じ合わせることを求めている気がします。



こういう活動がどんどん続いて恒例イベントになっていったらいいなと思います。最初の合同会議は全然意見が出なくて、どうなるかと思ったんですけど、回を重ねるごとに1年生まで発言するようになっていって。だんだん形になっていくのが見れて、やってよかったなって思います。来年はどんなパフォーマンスになるか？



多くのお客様の前で必死にパフォーマンスを展開

部活動が持つ生徒を変える力。変化していく様子を目の当たりにして ～教師って素敵な仕事と思う瞬間～

私たち教員自身も、生徒と一緒に回を重ねながら学んでいる感じがして、教員としてはすごく嬉しいんです。毎年文化祭があるからこそ、「前回こうだったから、次回はこうしよう」というふうに改善を重ねて良くなっていく。生徒たちがどんどん伸びていく、この最高の瞬間に立ち会えるというのが、本当に楽しいなって思います。

(ドラマのラストシーン)

めぐるの視点は、「未来の保証」から「今の繋がり」へとシフトした。

めぐるは、奏先生の言葉・エビデンスを信じ、かるたに没頭する。仲間達や奏の旧友達の支援を受け、都大会の決勝まで進出するが、結果は準優勝。大会後の会場出口で、奏先生が母校の応援に訪れた、かるた部の旧友達に会い、昔話に花が咲く姿を見て感じ取る。

「先生は、今でも団体戦をしてるんだ」「デスゲームみたいな人生を、みんなで円陣組んだり声掛け合ったりして」先生の宝物ってもしかして？振り返るとそこには、めぐるの仲間たちがいて…自分が本当に探してたものは、この仲間のことで、すでにここにあったことに気づく。

奏先生のおかげで、めぐるにも10年後、団体戦を共に戦っていける仲間ができた。ラストシーンでは、大学生になって、旧友達と共に青春を謳歌しているめぐるの姿が描かれていた。

奏先生に出会い、青春セレブの10年後の姿を目の当たりにしためぐるは、「青春セレブな過程」「時間を忘れて何かに打ち込むこと」が、たとえ直接的な金銭的成功に繋がらなくても、人としての成長、かけがえのない絆、人生を豊かにする経験といった形で、確かに「10年後の自分」を支える「見えないエビデンス」になっている、という価値観を見事に導き出していました。

多様な青春を認め、理想を現実に近づけるために

文化部、運動部と形は異なりますが、1つの分野に打ち込んでいることも、上級大学校進学を目指し、勉強に青春を傾けることも根本的な部分は同じであって、まずは本気で打ち込める何かがあること。そこで大事なものは、進路が保証されているかどうかではなく、生徒がどれだけ本気になれるか。火をつけるべきはこの本気で打ち込む姿勢そのものだと思います。

私達は、生徒達の理想を現実に近づけるために、自分の経験を元に、常に研鑽していかなければならないと思っています。多くの情報や、新しい技術も取り入れながら…もっと上手くなりたい、強くなりたい、もっと知りたい…もっと成長したいという内発的な学びの意欲を育むような環境づくりに全力を注いでいきたいです。

この環境づくりには、活動を理解し応援して下さる保護者の皆様の協力が不可欠です。上手くいっているときもあれば、壁にぶち当たり苦難の時もあるかもしれません。そんなときは、あたたかくバックアップしていただきたいです。そして、今回のドラマの言葉を借りれば、この活動に打ち込む生徒たちの青春セレブな時間は、何物にも代えがたい価値があるので、その時間を死守し、生徒たちに最高の経験の場を作ることが私たちの使命だと思っています。青春セレブは贅沢品かもしれませんが、その贅沢こそが、お子様の人間的な成長につながる1番の投資である。と強くお伝えし、ご支援いただきたいです。

おわりに

私たちは、今、目の前の生徒達に対して、自分たちの経験を活かし、新たな青春セレブを生み出していけるように頑張っていきたいと思っています。不安定な社会情勢の中で、強く生き抜いて行く力を身につけてほしい。

10年後も、場所は違っても、あの時、共に頑張ったという仲間を作って欲しい。と願って活動しています。

そのことを改めて思う、貴重な時間でした。



令和7年12月8日 国分スタジオにて

令和6年度 母校のトピックス

令和六年度同窓会賞



赤石沢颯河 矢沢 結依
小野寺和希 吾妻 樹
影山亜佑子

三世代賞

受賞者には三世代の名前の入った記念の楯と記念品として置き時計が贈られました。令和5年度までに84名の受賞があり、今回の5名を合わせると計89名の受賞となっています。

※「三世代賞」は、卒業する生徒ご本人・ご父母様・祖父母君様の三世代に亘る母校愛に敬意を表するもので、平成15年度に設けられました。

令和6年度 アカシヤ会学業努力賞



熊田隆之介(安積) 佐藤 菜月(仁井田)
高山 遥登(郡山七) 水井慎太郎(郡山六)
江尻 博亮(石川) 小林 未来(玉川)
新田 祐貴(ひらた) 山河ひなた(小塩江)
遠藤 柚杏(大槻) 山田 亜美(郡山四)

令和6年度 アカシヤ会スポーツ・文化功労賞



安齋 響(二本松二) 矢吹 匠(石川)
井上琉之亮(矢吹) 小野 大輝(ひらた) 松崎 大周(裏磐梯)
遠藤 瑛汰(北信) 菱沼 未来(安積二)
君島 凧(郡山三) 黒子 遼人(安積)
國分 夏(三穂田) 湯坐斗喜也(鮫川)
後藤 俊文(郡山五) 遠田 悠翔(安積二)
佐久間翔梧(鏡石) 村上 安貴(郡山四)
佐藤 蓮華(石川) 今野 陽菜(富田)
陣野 莉心(白河二) 佐藤 愛珠(白河中央)
関下 爽夏(福島大附属) 吉田 ゆう(船引)
野崎 凰惺(白河二)

令和6年度 卒業生合格状況

令和6年度卒業生総数504名 ※延べ人数、令和7年3月10日現在

日本大学 277名

国公立大学 45名

他私立大学 236名

専門学校 3名

◆ 日本大学

法	14	経済	21	芸術	1	危機管理	1	理工	41	工	91	薬	2
文理	23	商	16	国際関係	15	スポーツ科	2	生産工	20	生物資源科	27		

◆ 国公立大学

※詳細は学校HPをご覧ください。

東北大学	2	筑波大学	1	埼玉大学	1	新潟大学	3	福島大学	8	会津大学	4
------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---

ほか

◆ 私立大学

早稲田大学	1	明治大学	5	同志社大学	2	青山学院大学	2	明治学院大学	2	成蹊大学	2
慶応義塾大学	1	東京理科大学	2	中央大学	2	法政大学	2	芝浦工業大学	7	東京薬科大学	2

ほか

令和六年度 退職された教職員(異動含む)

※敬称略



大久保 智弘【情報】

おおくほ ともひろ

在職期間：
2018年4月1日～
2025年3月31日



神保 明子【英語】

じんぼ あきこ

在職期間：
2021年4月1日～
2025年3月31日



鈴木 久絵【家庭】

すずき ひさえ

在職期間：
2022年4月1日～
2025年3月31日



今泉 恒久【理科】

いまいずみつねひさ

在職期間：
2023年4月1日～
2025年3月31日



芳賀 柊平【理科】

はが しゅうへい

在職期間：
2023年4月1日～
2025年3月31日



橋本 淳平【英語】

はしもと じゅんぺい

在職期間：
2023年4月1日～
2025年3月31日

昭和の子ども文化 お宝展 ～昭和100年に寄せて～

昨年に続き、2025年7月6日(日)～8月17日(日)まで白河市の中山義秀記念文学館で開催されました。これは昨年のお宝展が好評であったことを受け、ぜひ、もう1度開催してほしいという熱烈な多くの声に応えたものだそうです。7月20日(日)の午後2時からの、展示品の所蔵者である阿部正栄先生による「談話の集い」には、県内から駆けつけた昭和ファンを前に、ご自身の詩作についてや、当時の脚本家、俳優、さらにラジオドラマの秘話等にも触れられました。時折笑いも交えながらの先生のトークは今も健在で、現役時代と変わらず、会場を訪れた昭和ファンは目を輝かせて自身の子ども時代を懐かしんでいるようでした…。



斉藤栄一先生 書展

2025年1月8日(水)～11日(土)、けんしん郡山文化センター1階展示室にて斉藤栄一先生の所属する墨粹会(bokusuikai)の書道展が開催されました。先生は玄鳳の雅号で「壽無涯」を出展。淡く滲んだ柔らかな筆運びと、大胆なまでに大きさを変えて並べられた3文字は、書の前に立つ人の心に様々な波紋をなげかける…そんな深みのある作品に感服しました。



支部だより

郡山支部



郡山支部総会 2025年6月6日(金)
郡山ビューホテルアネックス 3階 雲水峰



2024年12月14日(土)
郡山支部第1回クリスマス大交流会と
題してOB、OGの家族が大集合！
於：アサヒビール園福島本宮店



須賀川支部



2025年8月29日(金)
ホテルサンルート須賀川

クラス会だより

塩田正宏先生元気会

2025年11月28日(金)、ビューホテル唐紅花で、昭和49年普通科2組卒21期生の有志10名が集い、90歳を迎えた恩師の健康をお祝いした。塩田先生は矍鑠(かくしゃく)としておられ、お酒も十分に楽しめました。過去の思い出話に花が咲き、中には時効となった「懺悔話」も飛び出すなど、場は笑いとともに盛会となりました。



退職教職員の会 令和7年度

【秋の定例懇親会】

11月3日(祝)、12時より郡山ビューホテルアネックスの舟津において、恒例となったランチをともにする定例懇親会が開催されました。この日参加されたのは、前列左より、猪腰先生、阿部先生、小山田先生、原田先生、横山先生。後列左より、藤田先生、斎藤先生、野口先生、大木先生、渡邊先生の10名。1年ぶりの再会を喜び懐旧の情に浸る時間を堪能されたとのこと。

「以前はアルコールメインの夜の会だったのが、今は明るいランチタイムの会合です。もちろん夜ほどではないけれどお酒もいただいて、とても和やかな楽しい会となっていますよ。」とは、事務局の渡邊弘幸先生の談。

編集部に送られてきた先生方の優しい笑顔が、何よりの証拠ですね。これからもお元気にご活躍されますように…。



受章おめでとうございます

瑞宝単光章受賞

昭和44年普通科1組卒 16期生

円谷 栄氏

1974年に福島県警巡査の職に就き、39年間の警察人生のうち29年を鑑識課でご活躍。その実績および功績が称えられて受賞されました。

お悔やみ

心よりご冥福をお祈り申し上げます。

- 古橋 栄吉先生 2024(令和6年)12月16日 享年89歳
- 味川 満丸先生 2025(令和7年)10月18日 享年87歳

小さな写真・大きな思い出

昭和40年3月普通科卒 12期生 鈴木 盛雄氏

桜の時期が終わる頃…事務局に写真(縦7.5cm×横5.5cm)数枚と短い文章が届いた。送り主は宮城県富谷市在住の鈴木盛雄氏(第12期生 普通科卒)である。

添えられた短い手紙には、「書類を整理分別中に、書類の一部から数枚の「小さな写真」が、はみ出し落ちた!その瞬間、高校時代の思い出がはじけた!60年前の記憶の復元である。早速、写真に写る中学以来の級友へ、それぞれの写真をレイアウトし、コピーして郵送した。写真に写っている他の級友とも連絡を取ろうと思う…」後日電話でお話を伺った。

～越境入学?・日大東北とのご縁～

◆小学校時代は父親の仕事(JRバス)の関係で転校の連続だった。中学も同じだった。岩手県の水沢中学校(現奥州市水沢中学校)2年の時、大学への進学を見据え、日本大学東北工業高校受験のために、祖母のいる磐梯熱海へ一人引っ越しを命じられる。そこから越境通学という形で郡山第二中学校への転学を父親が決めた。正直転校はしたくなかった。しかし、内気な少年は従うしかなかった。◆中学で気の合う友ができた。須田修一氏だ。彼とは奇遇にも高校でも一緒となり、今でも連絡を取り合う

仲だ。◆入学時の記憶をたどる…旧1号館の一階、西側の教室がかすかに脳裏に浮かぶ。担任は英語科の阿部雄一先生。熱心な指導を受けた。ほかの記憶は思い出せない。一つだけあった。体育の授業(ラグビー)で担当教員にタックルされ、下着まで破れるほろ苦い記憶だ。◆父親の(工学部進学)を裏切り、東京の日大経済学部に進学した。◆高校の記憶はほとんど消えてなくなりつつあるが、ふと現れた数枚の写真が当時の記憶を鮮明に呼び覚ます。写真裏には1963年7月31日～8月3日新天神浜と万年筆の文字が色あせて残っている。テント前での笑顔、湖畔のボート、そして雄大な磐梯山を背景に撮影した写真たちは、不思議と活力を与えてくれる。◆日大東北とのご縁があったからこそ、今の自分がある。出会ったご縁を大切にしながら、今日まで人生を生きてきた。これからもそれを大切にしたい…。

「久しぶりに恩師の声が聴きたくなったなあ～」と、受話器を握る鈴木氏の顔が見えた気がした。



猪苗代湖天神浜



昭和40年3月普通科卒12期生の学校訪問およびクラス座談会開催

日時 2026年(令和8年)1月24日(土) 午前11時～

場所 母校日大東北 3年2組教室にて

発起人 鈴木盛雄

※みなさん!お元気ですか? 僕たちは間もなく80歳になろうとしています。恩師の阿部雄一先生は90歳で今も元気にいらっしゃいます。この機会にぜひ座を共にして旧交を温めてみませんか? なお、阿部雄一先生とご縁のある方も大歓迎します。連絡先 **080-8244-4217** へ「ショートメッセージ」または「通話」でご連絡ください。ぜひみなさんの参加をお待ちしています。

(鈴木盛雄)



12期生普通科クラス全員の入学時オリエンテーション集合写真
一切経山(いっさいきょうざん)磐梯山スカイライン裏

返信はがき掲載希望コメント

※紙面の関係上、一部割愛させていただいております。ご了承ください。

嶋栄吉氏：普通科昭和53年卒 25期生 青森十和田市在住
会報誌『桜朶』をいつもありがとうございます。毎回楽しみに拝見しています。さて今年、母校同窓会は設立70周年の記念の節目ですね。去る10月3日(金)には郡山市内のビューホテルアネックスにて同窓会主催の祝賀会と『桜朶70周年記念号』が発行されたとのこと、心からお喜び申し上げます。これまで多くの先生方のご努力とご尽力に感謝し、祝賀申し上げます。
今回私は、残念ながら会場には足を運べませんでしたが、ささやかながら記念誌発行広告に協賛させていただきました。高校時代の『渦流』(生徒会発行誌)の恩師のイラストを用い、「日大東北高校で出会った恩師小松先生の教えは、永久に不滅です。」を確認し、ともに70周年の節目をお祝いした気持ちで安堵しました。
私は60周年記念事業の折から、現在に至るまで同窓会会報誌のクラス報告欄に何度か寄稿させていただきました。それら同期生たちとの思い出の記録は、小松先生のご親族にも読んでいただくことを想定したものでしたが、お陰様で多数の記事と写真が掲載されましたことに感謝申し上げます。
同窓会会報誌の『桜朶』は「現役時代の活動の証し・貴重な記録・卒業生と母校を繋ぐ絆・未来の資産(レガシー)になる」ということを感慨深く感じております。
最後に、同窓会会報誌の編集を長く担当されてきた高橋敏行先生が今年度定年を迎えられるとのこと。ご定年おめでとうございます。先生のこれまでの母校での教育と同窓会事務局活動へのご尽力に心から敬意を表します。感謝!!
愛するわが母校日大東北! 80年に向けて、これからも常に幸あれ…!

齋藤正博氏：工業化学科卒 5期生 本宮在住
第5期工業化学科卒の齋藤正博です。福島民報「ふるさと記者」として「南達会」の事業などを毎回発信しています。卒業後67年が過ぎ、同級生の約半数が亡くなり、寂しくなりました。今の自分があるのは「日大東北高校」に世話になったお陰といつも感謝しております。仕事で開発に携わった「酸素系漂白剤過炭酸ナトリウム」が花王「ワイドハイター」として全国のクリーニング店で使用され、また「過酸化カルシウム」は農業や漁業関連に活用されるなど、関連特許を6件取得できました。また長年の民生委員活動が認められ藍綬褒章をいただいたのも有り難く思っています。日本大学東北高等学校の益々の発展をお祈りいたします。

伊藤和幸氏：電気科卒 38期生 田村市在住
38期生の伊藤和幸です。書道活動も37年目となり、「城芳」の雅号で漢字部・ペン字部・細字部・実用書部の師範資格で「墨雅書道会」の理事をしております。また、横道青年会最高顧問、横道若連会最高顧問、横道地区相談役最高顧問、横道ペン字クラブ会長、横道書道協会会長も担当しています。恩師、斎藤政雄先生の「地元をもっと盛り上げて…」の言葉を胸に、東京電力第一発電所30km圏内の自宅を中心に、時に地元の貧しい方に食べ物を届けることもあります。たった1人でも仕事に書道に現在も奮闘中です。斎藤政雄先生いつまでも、お元気でいらしてください。



橋本信吉氏：機械科卒 8期生 横浜市在住
お世話様です。当面は紙の会報をお願いします。私は高校卒業後に日産自動車株式会社に入社し、設計課、検査課を経て平成まで役員を務めました。60歳で定年後は、町内自治会会長をはじめ、交通安全協会支部長や横浜市環境事業地区会長等をやっています。

日下部勝英氏：建設科2組卒 10期生 本宮在住
卒業してから早くも64年の月日が経ちました。「桜朶」を通して母校の近況を拝見していますと、自分が通っていたあの頃の様子が目に浮かびます。昔と現在では、私にはとても考えが及ばないほど社会情勢が大きく様変わりしています。IT通信技術の発達により、良くも悪くもあつという間に情報が全世界に広がり、驚くばかりです。でも、いくらIT技術が発達しても、私にとって母校の近辺情報は、やはり「桜朶」の便りが頼みの綱です。これからもぜひ末永く発信つづけてくださることを卒業生として宜しく願い申し上げます。

添田浩一氏：機械科卒 46期生 郡山市在住
LINE登録しました。会報ありがとうございます。また、同窓会70周年記念行事の開催おめでとうございます。数々のご活躍をみていると、大変喜ばしいです。娘は早くも中学生になります。私は日々大変なことも多いのですが、健康で頑張っている母校の生徒の皆さんから活力をもらっている気がします。10月3日の詳細報告待ってます。



●皆さんの近況をお知らせください。
クラス会の呼び掛けや近況報告を会報に掲載することができます。

※会報に掲載を希望する方は、☐に☒印をしてください。
☐に印がない場合は掲載をいたしません。 ☐掲載希望



桜采編集部よりお知らせ

★桜采23号からはデジタルでの配信となります。公式LINE登録をお願いします。

★次回24号(2026年冬発行予定)の原稿を募集します。公式LINE及びHPまたは
従来通り直接事務局までご相談ください。

<お詫びと訂正> 本誌22号P5の記事「高校時代の思い出」下の記事のお名前に誤植がありました。青山洋一郎氏ではなく、正しくは、「青山陽一郎」氏でした。お詫びし訂正いたします。

編集後記

今号も無事に皆様のもとへ会報誌「桜采」をお届けできましたことを、心より感謝申し上げます。

今号のインタビュー記事でも詳しくご紹介しております通り、本誌「桜采」は平成22年に復刊を果たしました。この止まっていた時計の針を再び動かし、今日まで編集の最前線で私たちを導いてくださった高橋編集長が、今号をもちまして一区切りを迎えられます。一度途絶えてしまったバトン拾い上げ、母校と卒業生を結び直してくださったその情熱に対し、編集部一同、改めて深い感謝を捧げます。なお、今後は「顧問」というお立場で、引き続き「桜采」を支えていただくことになりました。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

また、今号よりWeb(ウェブ)での配信へと移行いたしました。昨年の段階で「紙ベース(郵送)」を希望された皆様には、変わらずお手元に冊子をお届けしております。

ただ、編集部として1点案じておりますのが、「ご希望いただいた皆様のお手元に、この1冊が漏れなく無事に届いているか」ということです。もし届いていないという方がいらっしゃいましたら、大変お手数ですが事務局までお知らせいただけますと幸いです。「桜采」には、卒業生を繋ぐ場として無限の可能性があると信じています。しかし、その可能性を形にするのは、卒業生の皆様お1人おひとりの「声」に他なりません。皆様からの近況報告や情報提供こそが、誌面に命を吹き込みます。この絆を末永く繋いでいくために、皆様の温かいご協力を心よりお願い申し上げます。(編集部一同)

《同窓会のHP(ホームページ)について》

同窓会のHPでは、「住所変更」や「お問い合わせ」が可能です。

さらに会報誌「桜采OUDA」1号～22号のバックナンバーも
ご覧いただけます。http://www.nichidai-tohoku-dousoukai.com

郵便はがき

9 6 3 1 1 6 5

切手を貼って
投函して
ください

郡山市田村町徳定字中河原 1

日本大学東北高等学校

同窓会 行

【個人情報の取り扱いについて】

1 ご提供いただいております個人情報は以下の目的で使用いたします。

同窓会が本来の目的とした活動をする場合、また必要と思われる作業を進行する際など合法的な目的のために活用する場合。(同窓会会報、総会通知、クラス会通知、支部会通知、周年募金・寄付活動・会費徴収の発送宛名及び各種リスト等) 同窓会会員名簿の作成。

上記1の使用に当たっては、氏名、フリガナ、郵便番号、現住所、電話番号、勤務先名、勤務先電話番号を利用させていただきます。

2 個人データの第三者提供の制限

ご提供いただいております個人情報の内容は、本人の承諾なしに学校、同窓会関係者以外の第三者に開示、提供することはありません。ただし、以下のような場合は、例外として情報を開示できるものといたします。

法令の規定による場合

ご本人及び公衆の生命、健康、財産等の重大な利益を保護するために必要な場合

3 個人情報管理について

ご提供いただいております個人情報はデータ処理等の業務委託をお願いしております業者において機密保持に万全を尽くすことの確約を得ております。

4 個人情報の開示・訂正・削除について

個人情報は原則として本人に限り、開示・訂正・削除・利用の停止を求めることができます。

個人情報の取扱に関する件で何か申し出がある場合は、同窓会(日本大学東北高等学校同窓会(アカシヤ会)へ左記のハガキ、もしくは下記ホームページよりご連絡ください。

ハガキでの返信もしくはホームページへの返信のなき場合には、承諾していただけたものとさせていただきます。ご了承いただけますようお願いいたします。

お問い合わせ

日本大学東北高等学校同窓会

郡山市田村町徳定字中河原 1

http://www.nichidai-tohoku-dousoukai.com



同窓会HP

現住所	〒 都道府県		
TEL	携帯		
氏名	生年月日	男・女	
卒業年	※いずれかに○をつけてください。 建設・機械・電気・工業化学 普通・土木・建築 年3月卒		